ふるさと

「令和」揮毫手がけた書家

茂住菁邨（もずみせいそん）さん 67

青木久雄撮影

岐阜県古川町（現飛騨市）

＊書の道「兄超える」目標に

小京都とも呼ばれる古風な町並みが特徴の旧古川町（現・飛騨市）の出身です。国連教育・科学・文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録されている「古川祭」では豪華な屋台が街中を練り歩き、私も祭りに合わせて帰省します。大ヒットアニメ「君の名は。」のモデルになった駅のホームや神社もあります。

小さい頃は勉強が嫌いで、縛られるのが嫌でした。小学生の時は習字教室の月謝のお金で駄菓子を買ったり、中学時代は学校にいたクジャクをずっと見ていて朝のホームルームを欠席したり。高校は隣の高山市の斐太（ひだ）高校に進みましたが、やりたいことも特にないような日々でした。同じ高校だった2歳上の兄・修史は生徒会長を務めるほどで、自分とは違い優秀でした。

京都の短大に進学し、卒業したら実家の布団店の家業に携わろうと思いましたが、親からは次男であることを理由に違う道を進むように言われました。別の大学に入り直そうと思い、受験の日程が間に合ったのが大東文化大。入学すると、書道が得意な兄から「書で有名な大学だよ。やってみたら」と勧められ、これが大きな転機となりました。

300人を超える部員がいた書道部に入り、「何か一つは兄を超えるものを持ちたい」という思いで必死に書き続けました。初めて打ち込めるものができ、二十歳と遅い時期から始めましたが、実力はどんどん上がり、3年生で部長に。欠員が出た総理府（現・内閣府）の辞令専門職を大学から紹介され、就職しました。

国務大臣の任命の辞令や国民栄誉賞の賞状などを書いてきましたが、最大の仕事は2019年に菅義偉官房長官（当時）が発表した新元号「令和」を揮毫（きごう）したことです。

「平成」を手がけた河東純一さんが上司だったので、代替わりが決まってからは私が担当するかもしれないという覚悟はありました。新元号発表の日は活字で渡された「令和」を用紙に何枚か書き、一番良いものを額縁に入れました。菅さんによる発表はテレビで見守り、記者会見後、菅さんに「（令和の字は）どうでした」と聞くと「まだ見てないんだよ」と言われました。額を渡されてからは国民に「令和」を見せることに集中したとのこと。お互いに自分の仕事にまい進したんだなと感じました。

発表後は「新しい時代が始まる感じだ」など令和に好意的な声を多く聞くことがあり、「元号を担当でき、うれしい」とようやく感じるようになりました。21年に退官した後は「様々な人の支えで令和を担当できた。書で恩返ししたい」と書家として本格的に活動し始めました。

令和のおかげで地元に関わることも多くなり、飛騨市の市長を表敬訪問したこともあります。母校の中学校や高校に校歌の一節を題材にした作品を寄贈したほか、地元で個展も開きました。学校や福祉施設を回り、書を教える活動にも携わっています。

「令和」は、自分のことを多くの人に知ってもらうきっかけになったと思っています。これからも、自分の書家としての経験を、ふるさとを元気にすることに生かしていきたいです。

（聞き手・大前勇）

【思い出の1枚】兄と一緒に

子どもの頃の七夕の際、兄の修史と並んで一緒に撮った写真です。

勉強が得意な兄とやんちゃな弟でしたが、兄弟の仲は良かったです。兄はいろんなことを知っていて何事も一生懸命な人でした。

書の道を紹介してくれたのも兄ですし、人生の節目にヒントを与えてくれることが多かったです。何かあると方向付けしてくれ、自分にとって、アドバイザーのような存在でした。